令和４年11月19日

松本城三の丸跡土居尻第16次発掘調査

現地見学会資料

松本市教育委員会

１　調査の概要

⑴　遺跡の所在

松本市大手３丁目

⑵　調査の目的

内環状北線整備事業に伴う緊急発掘調査を実施し、記録保存を図るものです。

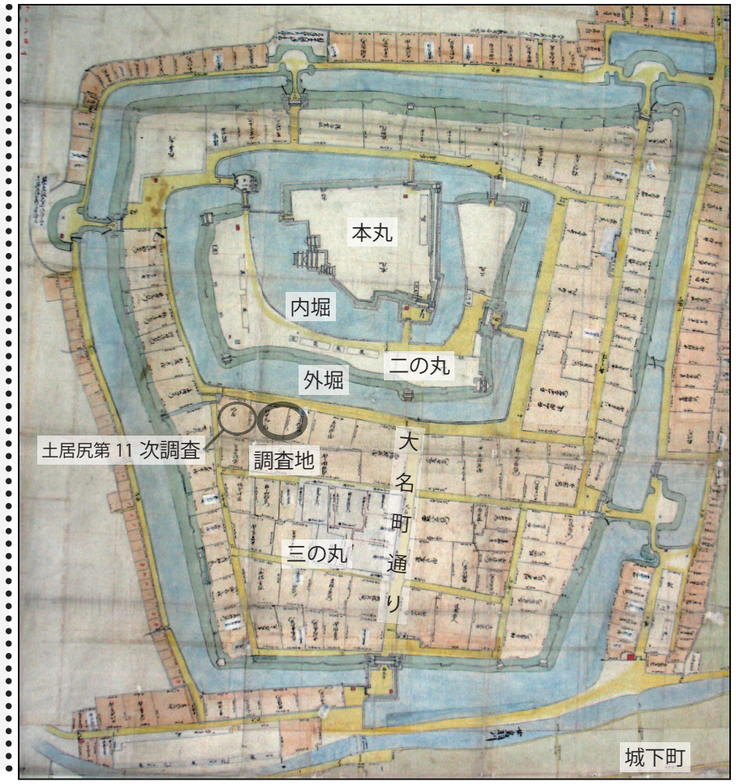
⑶　調査期間

令和４年８月～継続中

⑷　調査面積

約３４０㎡（平面積）

約１，１００㎡（のべ面積）



「享保十三年秋改松本城下絵図」（一部改･松本市教育委員会所蔵）

２　土居尻について

松本城は本丸・二の丸・三の丸と、それぞれを囲む３重の堀（内堀・外堀・総堀）で構成される城郭部分と、その外側に位置する城下町で成り立っています。江戸時代、三の丸には家老をはじめとする家臣の屋敷地などが立ち並んでいました。土居尻は、三の丸の南西部分の地区で主に中級武士の屋敷が広がっています。

今回の調査地は、南外堀の南側に位置する武士の屋敷地にあたります。藩主水野氏時代に描かれた絵図（「享保十三年秋改松本城下絵図」）に調査地を重ね合わせてみると、調査地は竹中九之丞氏と二宮権右衛門氏の屋敷地と推定されます。

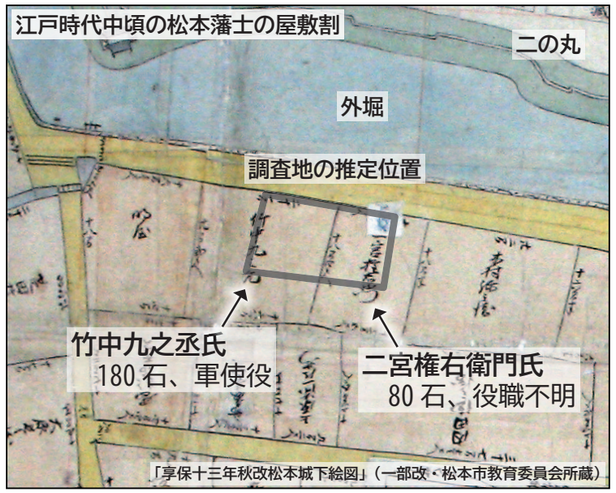
今回の調査地のすぐ西側の第１１次調査では、江戸時代後期の武家屋敷跡のほか、三の丸が形成される以前の中世の祭祀的な遺物などが確認され、今回の調査と成果が似ています。

３　発掘調査の成果について

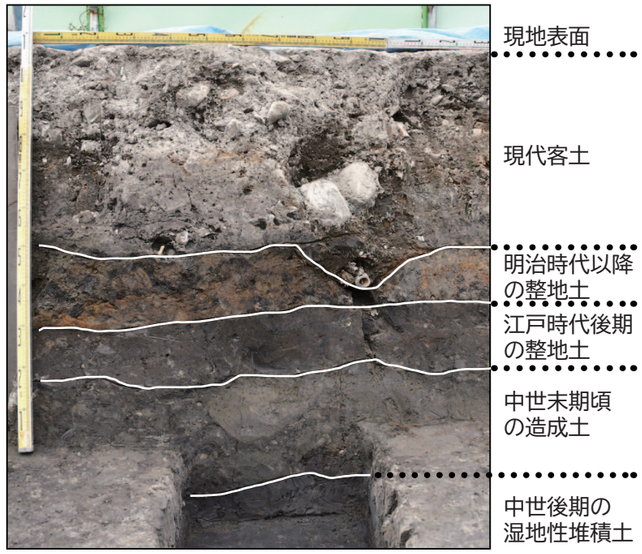
⑴　江戸時代の武家屋敷

江戸時代び武家屋敷に関わる遺構・遺物が出土しました。調査区の西部に２～３㎝大の礫を敷き詰めたような集石遺構がみつかり、その位置関係から、玄関や建物への出入口に敷かれたと考えられます。

出土遺物の生産時期から、江戸時代前期から末期までの遺構が確認できました。遺構密度が高くないことから、屋敷地は江戸時代をとおして大きく変わっていないことがうかがえます。



「享保十三年秋改松本城下絵図」（一部改・松本市教育委員会所蔵）



⑵　三の丸形成期の盛土造成

もともと湿地帯であった調査地周辺に、砂や粘質土など数種類土を混ぜた版築土で盛土造成をしていることが分かりました。その造成土から16世紀末～17世紀初頭に生産された瀬戸焼が混入していたため、小笠原貞慶か石川数正・康長が城主であった時の三の丸を整備した時代の造成土であると推定されます。その時代のことについてはあまり文献資料が残されていないため、今回の成果は松本城形成について理解するために、重要な手掛かりになると期待されます。

⑶　旧地形と中世の祭祀場

三の丸形成以前の調査地一帯の地形が、９世紀頃（平安時代）までは小川が流れ、１６世紀中頃～末にかけて水草が生育する泥深い沼地のような環境であったことがわかりました。三の丸が整備される前は長らく水辺であり、人が住めるような場所ではなかったことがうかがえます。

また、調査の結果、沼地になる直前に小川で何らかの祭祀を行った形跡がみつかりました。小川の底面から、獣骨（馬や鹿など）と共にこけら経や笹塔婆と言われる木簡が出土しました。以前実施した第１１次調査地点からも、こけら経等の祭祀的木製品が数百点出土しています。生活道具はほぼ認められなかったことから、一帯は何らかの祭祀を行った空間であったと考えられます。

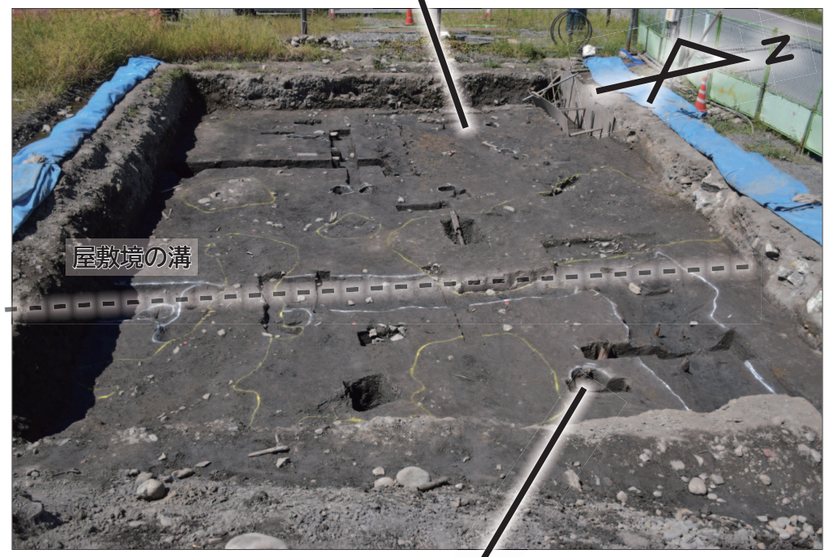
こけら経と笹塔婆（ささとうば）とは

こけら経・笹塔婆は短冊形の木の薄片に経文（こけら経）あるいは仏や菩薩などの名号（笹塔婆）を墨書したもので、死者への追善供養に使われました。

江戸時代（17世紀から19世紀）の様子

石敷き遺構

数cm大の石が敷かれていました。屋敷地内の位置関係から、出入口付近がぬかるまないように敷かれた石であると考えられます。



全景写真（右が北）

柱穴と礎石

礎石として扁平な大形の石が使用されていました。

中世末（16世紀末）から江戸時代初期（17世紀初）の様子

建物跡

見つかった柱穴から、２間（約３．６m）×４間（約７．２m）の建物であることが分かります。

木枠の井戸

一辺５０cm程の方形状に組まれた井戸の木枠が見つかりました。近くにも素掘りの井戸が確認できることから、一帯が水位の高い環境であることが分かります。

建物の柱材

水分を多く含んだ土に埋もれていたため、非常に良い状態で保存され出土しました。

中世後期（15世紀後期～16世紀中期）の様子

獣骨と笹塔婆（ささとうば）

小川の底から、馬や鹿のものと考えられる獣骨が、笹塔婆などの祭祀具と共に出土しました。

全景（左が北）

東から西へ流れる小川が３本確認できました。底面に堆積していた石のサイズから、かなり緩やかな流れであったことがわかりました。